

2023年度 大竹手すき和紙プロジェクトレポート

【担当教員】

学部・学科・専攻	職名	氏名
代表者：芸術学部・デザイン工芸学科・漆造形分野	准教授	青木伸介

【プロジェクトの概要】

2019年度より開始した大竹手すき和紙保存会との連携は、社会連携プロジェクトを契機に継続した活動として現在まで様々な形で取り組んできた。地域展開型芸術プロジェクトにおいては、地域実践演習の授業を取り入れながら、昨年度は履修学生を含めた学生8名を対象に、手漉き和紙の技術継承を続けている。

今年度の地域展開型芸術プロジェクトは、おおたけ手すき和紙の里で保存会と連携した技術継承を軸に、芸術における和紙の可能性の探求をおこなった。現在の大竹手すき和紙は、地域住民やボランティアの会員で構成される保存会が生産を続けており、400年以上続く伝統の方法を守り、楮の栽培から紙料にするための加工、流し漉きによる和紙製作まで一貫して行なっている。その和紙から作られる手描き鯉のぼりは、今も受け継がれ作られており、市のコミュニケーション・シンボルマークやPRキャラクターとなって親しまれている。市としても有形文化として後世に残してゆくために、その継承と発信に期待を寄せている。しかしながら、原材料の確保や和紙の活用方法などの課題を抱えている。

本プロジェクトでは、和紙の素材や道具、技術を地域の関わりから見直し、風土や人を介して伝承する工芸の本質を理解しながら、地域との持続可能な繋がりをつくることで、その環境に根ざした創作の機会を得ることを目的としている。今回のプロジェクトは、参加学生が作品制作に取り組み、その成果を大竹市で発表することで、地域に根ざす取り組みとして広く認知してもらい、参加学生がより深く関わりを持てるようなプロジェクトを目指す。

【プロジェクトでの成果等】

今年度のプロジェクトでは、過年度と同じく大竹手すき和紙保存会と連携した、学生を対象にしたプログラムとして、大竹和紙の400年続く制作工程を、実地を通して学び習得したうえで、大竹和紙を使った作品を制作し、大竹市立図書館で成果展として発表を行った。毎年、学部3年生を対象とした地域実践演習において、プロジェクトと連動した授業を行なっていたが、今年度については「地域にある工芸の今を考える」というプログラムへの履修学生が無かったため、プロジェクトの参加者は、その他の学生6名となった。ハノーバー専科大学の交換留学生については、専門演習Ⅰの中で取り組むことになり、前期9月までの在学期間の参加となった。その他は、漆造形分野の学部2年生2名、博士前期課程の学生2名、研究生1名である。

・6月5日（月）大竹手すき和紙保存会との協議

保存会会長と漉き手会員とプロジェクトの内容について協議し、日程調整を行った。今年度は、大竹和紙を使った手描き鯉のぼりの制作現場を調査することをプログラムに組み込んだ。また、最終目的として、成果発表展を大竹市で実施する場所等についても合わせて確認をした。

	月	日	曜日	開始時間	時間	作業内容
1	7	9	日	10:00~11:00	1H	コウゾ芽かき作業 *作業は9時から初めて手ですが、10頃から作業実習
2	8	24	木	10:00~14:00	3H	白楮釜煮/水晒/アク抜き/溜め漉体験 *9時集合 水槽内楮仕分け *10時 楮煮込チェック *11時~14時 小型漉き体験
3	9	中旬		10:00~12:00	—	手書き鯉のぼり制作現場調査 ⇒ 和紙工房
4	11	11	土	10:00~12:00	ポ	刈り取り
5	11	18	土	10:00~12:00	2H	釜蒸/皮ハギ/ソブリ
6	11	24	金	10:00~15:00	4H	紙漉(大型)/乾燥(乾燥機・板干し)
7	12月	~1月		成果発表		総合市民会館
合計						10H

・6月22日（木）事前打合せ

参加学生を対象に、大竹和紙の歴史的変遷や材料などについて、漆工房にて講義を行った。また、プロジェクトの内容について説明を行った。

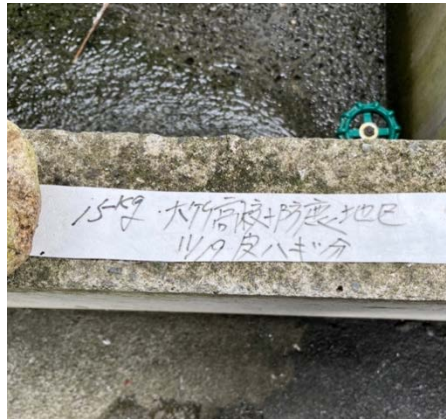
・7月23日（日）コウゾの芽かき作業、和紙制作工程の説明

ボランティアや会員と共に、保存会が栽培しているコウゾの脇芽を手作業で摘み取る芽かきを行った。この作業をすることで、コウゾの幹が真っ直ぐ成長する。真夏の炎天下で体力が消耗する中で3時間に及ぶ作業は、10名以上の人数でも手間がかかる過酷な作業である。昼食後には、漉き手である保存会員の竹中氏から和紙制作の工程について簡単に説明が行われた。



8月24日（木）・白楮の釜煮、水晒し（アク抜き）、溜め漉き

乾燥して保存をしていた昨年収穫したコウゾの白楮を、水に一晩浸けて元の柔らかい白楮にもどして使用する。その白楮を大釜に沸騰させた湯で煮る。湯は薪を使い沸かす必要があり、早朝から火を起こして準備するため、手間の掛かる仕事である。湯には、楮の繊維を柔らかくするため木灰を入れる。現在はより効率の良い苛性ソーダを入れているが、排水の処理に手間がかかる。水槽から引き上げた白楮を、湯に投入する。煮る時間は数分単位で調整する必要があり、幅の広い白楮を先に入れ、細いものは後に投入するなど、その煮上がりは見極めによって和紙の仕上がりに大きな差が生じるため、工程で一番気をを使う作業となる。引き上げのタイミングは、白楮を一本引き千切り繊維の断裂をみて判断する。煮終わった白楮は早急に釜から引き上げ、それ以上柔らかくならないようアク抜きをするため、水を溜めた水槽に入れ一昼夜水晒しにする。その過程で白楮は紫外線により徐々に白くなる。



昼食の後、午後から小舟を使った溜め漉きの実習を行った。溜め漉きは、簀桁で水に紙料とトロロアオイのネリを入れた溶液を何度も掬い上げ、その溶液を上下または左右に動かし均一厚みに漉く、いわゆる流し漉きと違い、溶液を簀桁で単純に掬い上げて水分が落ち切るまで静止して漉く方法で、紙漉きの原点とも呼べるものである。この方法では、一度に掬い上げる水量が多く重いため、余り大きな紙を作ることはできない。繊維の絡みも弱いため、薄く漉くと破れやすいが、味わいのある豊かな紙に仕上がる。保存会では、一度に2枚漉ける桁で、小学校の卒業証書を作っている。今回はその桁で、再生紙として叩解し直した紙料を使い、学生に実習を行っている。掬い上げた水の重さに戸惑いながらも、数回もすると徐々に感覚を掴んでいた。コウゾの皮の繊維が紙に変わってゆく過程を目の当たりにすることで、自然の力の美しさやものづくりの本質を感じることができる。



9月6日（水） 手描き鯉のぼり工房調査

現在、広島ブランドに認定されている手描き鯉のぼりを唯一制作している、作家の杉本海氏の工房に調査のため訪れた。工房は大竹駅から近い商店街にある大竹和紙工房の2階にある。1階では和紙を使った商品や地元の特産品などを扱うショップとなっている。杉本氏は自宅の広島市から週2日ほど通い鯉のぼりの制作を一手に行っている。手描き鯉のぼりの和紙は、保存会で専用の紙が作られ、鯉紙として扱われている。通常の和紙に比べると厚みがあり、風で煽られても破れることがない強靱な紙である。大きいものは数メートルになるものも作られており、より強靱にするために鯉紙を2枚にして張り重ね干して作る2枚干しの和紙を使用する。現存する古い鯉のぼりから型紙を取り、それをもとに和紙を裁断してパーツを繋ぎ鯉のぼりの形にする。鯉は背に金太郎が描かれたデザインで、下書きはなしで一気に筆で描き上げてゆく。参加学生も、本番の鯉に試し描きをする実習を行った。杉本氏は元々日本画家を目指していたが、縁あって手描き鯉のぼりの制作に関わるようになったようである。質疑応答の後、1階で小サイズの鯉のぼり絵を描いて終了となった。



・11月11日(土) コウゾ刈取り

保存会が栽培、管理育成しているコウゾは、順調に幹を伸ばし、秋口には葉が黄色くなり落ち始める。コウゾの畑には、長く伸びた幹だけが立ち並ぶ情景となる。コウゾの幹の刈り取りは、葉もなく樹液も出なくなったこの時期が見通しもよく最も作業性がよい。自然のサイクルを利用した理に叶ったものづくりであることが実感できる。しかしながら、数人で行うには重労働であり、人手を多く必要とする作業である。毎年ボランティアや会員総出で、各所に点在するコウゾ畑を巡り収穫をする。釜の大きさに合わせて、刈り取った幹をその場で切り揃える。運搬のしやすさや、その後の工程を考慮した合理的な作業となっている。今回参加した刈取りは、11月であったが、葉が幹の上部に残っている状態で行った。本来であれば、葉がおおよそ落ちているのだが、ここ数年は気候の変化もあり、葉の落ちが遅いとのこと。それにより、刈り取ったコウゾの残った葉を落とす手間が増えることになる。また、樹液の影響により皮膚に炎症を起こすことや、刃物の切れが悪くなることがある。実際に作業をすることで、自然から学ぶことが実に多くあることがわかる。



・11月18日(土) コウゾ釜蒸、皮ハギ

大竹市防鹿の作業場（おおたけ手すき和紙の里）には、コウゾを蒸す専用の窯場があり、11日に刈取り収穫したコウゾは、幹の太さによって選り分け、コウゾを蒸す大釜に合わせ、長さ1メートルほどに切り揃えられ束ねられている。コウゾの釜蒸しは、早朝から窯に火を入れ大釜の湯を沸かすことから始まる。一度に150kgほどのコウゾを蒸すことができる大釜で、午前と午後で計2回行う。多くのボランティアと保存会の会員が作業にあたるが、人手がいる一番の理由は、コウゾの外皮を剥ぐタイミングにある。蒸し上がった幹の芯と外皮との間に収縮の差が生じ、皮剥ぎが容易になる。この作業は熱いうちに終わないと皮が硬く締まってしまい剥ぎ取り難くなる。そのため大人数で素早く行う必要がある。近所の年配の方も、この作業になると手伝いに加わる。談笑しながら手際よく作業を進める姿は、この地域にかつてあった情景が感じられる。



・11月24日（金）ソブリ、流し漉き

18日に予定していたソブリ（楮皮の表皮を包丁で削いで除去する）を作業場で実施。この作業で紙料である白楮となる。和紙の白さを左右する大事な工程で、一枚一枚丁寧かつ手際よく行う必要がある。この作業が不十分であると、塵ヨリ（塵取り）の際に大変苦勞する。大舟を使った和紙漉きは保存会の事情により出来なかったため、小舟による流し漉きを行った。

以上が今年度の実地による伝統技術の継承プログラムである。

・成果発表 （大竹和紙プロジェクト作品展）



6月から開始した今年度のプロジェクトの成果として、参加学生6名が作品制作を行った。作品の展示発表は、保存会と大竹市生涯学習課のお力添えにより、大竹市立図書館の2階ギャラリーを会場として、2024年3月21日（木）から24日（日）に開催した。ハノーバー専科大学の交換留学生の作品は、前期までの期間に制作した紙胎の矢筒である。蓋や留め具はヒノキの曲物で作り、漆塗りで仕上げた。視覚造形の大学院生は、展覧会のポスターやフライヤーのデザインを担当した。出品作品は、和紙で仕上げた日本酒のパッケージをデザインした。その他にも、和紙と漆の乾漆像やインスタレーション、オリジナルの鯉のぼりや大竹和紙を紹介するタペストリー、千切り絵などが一同に並んだ。それから、今回の展覧会には、過年度プロジェクトの参加学生であった2名にも、その際に制作した作品を出品してもらった。各々の和紙を使ったオリジナリティー溢れる作品を大竹市で発表できる良い機会となった。多くの関係者の方の協力もあり、中国新聞やRCCのラジオ放送で取り上げられ紹介いただいた。その効果もあり、4日間と短い会期にも関わらず、130人近い来場者があった。保存会の会長から来年度に新たな展示の機会の話もあり、次につながる結果と課題を得ることができた。

上：会場の大竹市立図書館と展覧会フライヤー

下：展示会場内と出品作品一部

